

外国語教育の意義と役割

－ 言葉を学ぶ意味 －

長崎精道小・中学校における

令和元年度「学校力をパワーアップ わたし立学校実践支援事業」成果報告会

2019.11.22. 長崎精道小中学校にて

ただいまご紹介にあずかりました戸口です。まずは簡単に自己紹介を。

1946年 神奈川県大和市に生まれ、早稲田大学でフランス文学を学び、

1972年4月 長崎外国語短期大学に赴任しました。

以来、長崎外国語短期大学で、また2001年以降は長崎外国語大学で、フランス語・フランス文学などを教えてきました。

わたしがこれまでどんな仕事をしてきたか、興味がおありの方はわたしのホームページをご覧ください。「戸口民也」で検索すれば、こんな画面がでてきます。

戸口民也のWebサイト

- [自己紹介](#)
- [フランス語を学ぶ人のために](#)
- [戸口おすすめサイト](#)
- [参考図書／推薦図書](#)
- [文章表現 - なにをどう書けばよいか？](#)
- [レポート・論文の書き方](#)
- [フランス語とコンピュータ - フランス語入力方法／お薦めフリーソフト／漢字と文字コード](#)
- [Web En Paroles](#)
阿南婦美代先生の初級フランス語教科書『En Paroles (アン・パロール)』（早美出版社）を著者と出版社の了解・協力のもとに、インターネットでも利用できるようにしました。
- [著書／論文／エッセー／その他](#)
- [フランス17世紀演劇研究 - 文献目録](#)
- [Site en français](#)
- [『エイコス - 17世紀フランス演劇研究』総目次と全論文](#)
- [カトリックについて知ろう](#)

素っ気ない画面ですが、見た目より中身を重視しています。

今でもずいぶんたくさんの方がわたしのホームページを利用してくれているようです。

わたしの専門とする外国語はフランス語です。

ここにお集まりの先生方の多くは、あるいはほとんどが、たぶん中学で英語を教えておられる方々でしょう。

あいにくわたしは、中学生や小学生を教えた経験はありません。英語の教師でもありません。

ただ、先生方が教えておられる生徒さんたちが、将来大学で外国語を学ぶとき、何が求められるか、何を意識しながら学ぶべきかを、わたしの経験からお話しすることはできます。そして、外国語を学ぶ意味について語ることもできると思っています。

なぜならそれは、社会にでたあと外国語の力が必要になったとき、何が求められるかという問題に直結しているだけでなく、かりに外国語とは直接関係ない仕事をし、生活している場合でも、ものの見方、考え方にかかわってくる問題だからです。

わたしがお話しすることは、現時点での先生方の授業に「直接的・具体的に」役立つことはないかもしれませんが、しかし、先生方が教えている生徒さんたちの「将来」を見据えながら教えることには、役立つかも知れません。考えるヒントになれば幸いです。

今日は「外国語教育の意義と役割」というテーマでお話しすることになっているのですが…

「言葉を学ぶ意味」という副題をつけました。主題の「外国語教育の意義と役割」とも密接な関係があることです。なぜなら、今日の話でわたしが対象とするのは広い意味での「言葉」で、その中には外国語はもちろんですが、母語 — わたしを含めここにいる大多数の人にとってそれは日本語であります — 母語も含まれるからです。そして、外国語との出会いは、もしもそれが幸福な出会いであるとしたら、自分自身の言葉 — 母語についての認識を深め、さらにそのことがまた、自分が学んでいる外国語に対する理解を深めるからです。

ところで、「もしもそれが幸福な出会いであるとしたら」と条件を付けましたが、それは外国語と不幸な出会い方をした人にとっては、その言語だけでなく、外国語全般に対する拒否感や嫌悪感を植え付けてしまい、自分の言語 — 母語 — の中に閉じ込めさせてしまったりするからです。さらに、言葉だけでなく意識の上でも自分のなかに閉じこもる傾向を助長しかねないからです。

なぜ「言葉」にこだわるのでしょうか？

人は言葉によって考える

それは、人は言葉によって考えるからです。わたしたちのものの見方、とらえ方、感じ方、理解する仕方は、わたしたち自身が獲得した言葉に — 母語だけでなく身につけた外国語にも — 依存しているからです。「言葉」がわたしたちのあり方、生き方を方向付けているからです。

人は言葉によって考え、対象を — 姿や形がある具体的な「もの」であれ、具体的な形をもたない

抽象的な「概念」であれ — 、対象を言葉（つまりその対象がもつ「名前」）によって認識し、把握し、理解します。

ところが、名前のない「もの」や「こと」、あるいは名前を知らない「もの」や「こと」は、たとえ実際に存在しているとしても、それと認識されません。これはとくに、抽象概念についてはっきり言えることです。

姿・形がある「もの」なら、たとえ名前を知らなくとも、それを目の前にすれば、そこに「何か」があることは認識できます。でも、それが何であるかは、分かりません。その「何か」と似ている「それ」を知っているなら、「それ」との類似を手掛かりに、その「何か」を理解しようとするでしょう。ただ、その「何か」の名前も「実体」も分からないままだったとしたら、自分が知っている「それ」と似たもののようだけれど、それ以上は分からないままでいるしかないでしょう。

ところが抽象概念はどうでしょう？ その「名前」を言葉として知っていなければ、それについて考えることはおろか、想像することさえできません。たとえその「名前」を示す言葉に出会ったとしても、意味を理解することはできないのです。ただ意味不明の「音」として聞こえるだけ、意味不明の「文字」として目に見えているだけ、あるいは「文字」とすら認識できずに、意味不明の記号のようなもの — 点とか線とか筋 — が見えるだけかもしれません。わたしたちがまったく知らない外国語にいきなり出会ったとき、それを音として聞いたとき、あるいは文字、あるいは記号のようなものとして見たときの反応は、たぶん、そんなでしょう。

言葉のない世界

ひとつ試しに、言葉のない世界を想像してみてください。

《言葉がないって、どういうことなのだろう・・・》

ほら、すでに、言葉でそう考えていますね。「言葉」ということばも「世界」ということばも、「ない」ということばも、言葉として存在しないのです。

たとえ「もの」や「こと」が存在するとしても、それを示す「名前」が一切ない世界、「名前」がわからないのでそれが「何」なのかまったく分からない — そんな世界をどうやったら「想像」できるでしょう？

意味不明の「何か」だけがある世界、意味不明の「何か」だけしかない世界、意味不明の「何か」だらけの世界・・・ 気持ち悪くありませんか？

なぜ最初からいきなり、こんな訳の分からないことを言い出すのかと、怪訝に思われたかも知れません。それは、わたしが言葉にこだわる人間だからです。

なぜ言葉にこだわるかは、すでにお話ししたように、人は言葉によって考え、言葉によって対象を認識し、把握し、理解するからです。そしてこのこだわりは、わたしがこれまでしてきた仕事を通じて身についたものです。

ところで・・・

この言葉、ご存じですか？

Wer fremde Sprachen nicht kennt, weiß nichts von seiner eigenen.

フランス語にすると・・・

Qui ne connaît pas les langues étrangères, ne sait rien de la sienne.

では、英語にすると・・・

こんなふうには：

He who doesn't know foreign languages, doesn't know his own.

あるいはこんなふうには：

Those who know no foreign languages, know nothing of their own.

さらにはこんなふうにも：

If you do not know foreign languages, you know nothing about your own.

もう一度原文をどうぞ

Wer fremde Sprachen nicht kennt, weiß nichts von seiner eigenen.

— Johann Wolfgang von Goethe (1749～1832)

日本語に訳すと・・・

外国語を知らない者は自分自身の言語について何も知らない。

— ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ (1749～1832)

ゲーテのこの言葉、きつとご存じでしょう。言葉、とくに外国語教育に携わる者ならたいいていの人
が知っている言葉ですし、その意味するところもお分かりでしょう。

なぜ外国語を学ぶ？

言葉を学ぶ意味について、フランスの哲学者で批評家のロラン・バルトは、こう言っています。

Apprendre une langue, c'est apprendre comment l'on pense dans cette langue.

— Roland Barthes (1915-1980)

ある言語を学ぶということは、その言語で人はどう考えるかを学ぶことだ。

— ロラン・バルト

確かにその通りです。

外国語を学ぶ意味

世界には様々な言語がありますが、それぞれの言語にはその言語固有の特徴・個性があります。それは、言語によって、ものの見方、とらえ方、認識の仕方が異なるということです。

そのことは、外国語を学ぶことによって、知ることができます。

そして、外国語と自分の言語とを比較し、違いを知ることを通じて、自分の言語特有のものの見方や認識の仕方を知ることができるようになります。つまり、自分の言語を客観的に見るようになるわけですね。

反対に、外国語を知らなければ、自分の言語を客観的に見ることはできないでしょう。別の言語と比べることによってはじめて理解できる違いを知ることなしには、自分の言語の特徴や個性を知ることができないでしょう。それがゲーテの言っていることです。

言葉が違えば・・・

言葉が違うということは文化が違うということでもあります。その言葉を使っている人たちの考え方、ものの見方、振る舞い方は、自分とは違うのだということを知る必要があります。

外国語を知らないと・・・

外国語を — そして自分とは違った考え方・見方をする人たちが存在することを知らないなら、そのことを実感できないなら、自分の考え方・見方を絶対視してしまう危険があります。自分とは違う考え方をする人たちを理解することができず、最悪の場合、その人たちを拒絶し排除してしまうことになるでしょう。そうなると、もはや対話は成立しません、コミュニケーションは不可能となります。

まず違いを受け入れること

対話・コミュニケーションが成立するためには、まず違いを受け入れることが必要です。外国語学習は、そのための良い訓練の機会となるでしょう。外国語を — それもできれば複数の外国語を — 学べば学ぶほど、自分の言語とそれぞれの外国語との違いがよく分かってくるものです。

つまり、言語の多様性を通じて文化の多様性を知り、理解することができるようになるということです。

違いを理解できれば、それを受け入れることもできます。たとえよく理解できないことがあっても、理解し合えないことがあったとしても、それを受け入れることができるようになるでしょう。謙虚に、寛大に、自分とは違う人を理解し、受け入れることができるようになるでしょう。

さて、これから…

言葉について、もう少し考えてみたいと思います。

フランス語という言葉为例に

言葉による違いの具体例として、わたしが長年かかわってきたフランス語という言葉の特徴や「くせ」について、日本語との比較も交えつつ、紹介したいと思います。

フランス語は、日本語とはずいぶん違う言葉です。

それと比べれば、フランス語と英語の違いは、それほど大きくはありません。それでもやはり、はっきりとした違いはあります。

それはともかく、少しばかりフランス語という言葉にお付き合い願いたいと思います。英語とは少し違った世界を、そして日本語とはまったく違った世界へと、皆さまをお連れしたいと思います。フランス語の世界を経験することによって、英語という世界、そして日本語という世界の特徴が見えてくれば幸いです。

そのあとで、わたしたちの母語である日本語と向き合ってみたいとも思っています

フランス語の特徴や「くせ」について

まずはフランス語の読み方から

母語はまず耳から覚えます。外国語の学習においても、まず耳でよく聞いて音になじみ、発音の仕方を覚え、綴り字と発音の規則をできるだけ早く頭に入れる必要があります。

アクセントやイントネーションに注意しながら、センテンス・パラグラフ・文章全体をどう読むかを覚えることが大切です。

いまはインターネットでフランス語のニュース、スピーチ、ディスカッション、インタビューなどを見ながら聞くことができます。歌が好きなら聞いて歌えばよいでしょう。映画が好きなら見ればよいでしょう。CDやDVDのレンタルショップで借りて聞いたり見たりすればよいでしょう。機会はいくらでもありますから、それを利用しないのは愚かなことです。

よろしければ「戸口おすすめサイト」<http://www.nagasaki-gaigo.ac.jp/toguchi/links/index.htm> をご利用下さい。たとえば「フランス語のラジオ・テレビニュース」をどうぞ。

http://www.nagasaki-gaigo.ac.jp/toguchi/links/radio_tv_news_fr.htm

文法・文の組み立て方

単語を知らなくては、聞くことも話すことも、読むことも書くこともできません。だから、どんな言語でも、語彙力は基本中の基本です。しかし、単語を知っているだけではコミュニケーションはできません。

たとえば、喉が渇いているので水がほしいとしましょう。

水はフランス語では eau /o/（オー）です。では、「オー、オー」と叫べばよいのでしょうか？

— 違います。これを聞いたフランス人（またはフランス語が分かる人）は「え？ それ何？（意味不明の« Oh ! »という叫び声？）」と思うでしょう。

こう言えば伝わります — « De l'eau [, s'il vous plaît] ! » 「ド・ロー（シル・ヴ・プレ）」

フランス語の名詞は、冠詞がつかないと、具体的な意味を持ちません。名詞 eau だけだと「水」という概念を示すだけです。**フランス語独特の「部分冠詞」**をつけて de l'eau と言ったとき、はじめて具体的な「（ある量の）水」— わたしは喉が渇いているので「水」をくださいという意味での「水」となります。

もう一つ例をあげてみましょう。「（わたしは）駅に行きたいのですが」をどう言うでしょう？

「わたしは」— je、「駅」— gare、「行く」— aller、「・・・したい」— vouloir・・・

これをそのまま順に並べたら相手に伝わるでしょうか？

無理です。「え？ それ何？（意味不明！）」と思うでしょう。相手に理解してもらうためには、たとえばこんなふうに言います。

« Je voudrais aller à la gare. » ジュ・ヴードレ・アレ・ア・ラ・ガール

あるいは

« La gare, s'il vous plaît. » ラ・ガール・シル・ヴ・プレ

と言うだけでも、相手はこちらの意図を理解してくれます。

文法そして「文の組み立て方」を知らないと、意味が通じる文をつくることはできません。単語を羅列するだけではフランス語にはならないのです。

どんな言語でも、文法をしっかり勉強し、単語をどう組み立てて文をつくるかを覚えるのが大事です。文法やシンタクス（単語をどう組み立てて文を作るのか、その文法規則の総体＝統語法・統辞法）に無神経な学習者は、決して上達しません。

フランス語の語順の基本

- ・ 既知のもの（主題／話題）は前、未知のものは後
- ・ 情報の核となるもの（名詞）は前、それを修飾／説明するものは後

既知のものと未知のもの

- ・ 既知のもの（主題／話題）は前、未知のものは後

Comme il est tombé malade, il ne vient pas ce soir. 彼は病気になったので、今夜は来ません。

（彼が病気になったので、その結果彼は今夜どうするかを知らせることに重点があります。）

Il ne vient pas ce soir, parce qu' il est tombé malade. 彼は今夜は来ません、病気になったのです。

（彼が今夜来ないが、その理由は何かを知らせることに重点があります。）

Tu as écrit à tes parents? - Oui, je leur ai écrit.

親に手紙を書いた? — うん、（彼らに）書いたよ。

（「親に」は既知のことなので、「彼らに」は動詞よりも前に来ます。）

名詞とその修飾語

名詞（情報の核）は前、それを修飾・説明するものは後

une voiture rouge 赤い車

la voiture de Paul ポールの車

la voiture que j'ai achetée わたしが買った車

«Je suis allé voir le film que tu m'avais recommandé.»

「君が薦めてくれた映画を見に行ったよ。」

* フランス語では、名詞は冠詞（上の文だと une, la, le）や冠詞と同じ働きをする語をとるのが基本です。

日本語はその逆：修飾語が先で、名詞が後

ということは・・・

最後まで行かないと何が名詞だか分からない

日／仏 文の組み立て方の違い

「わたしはその映画を見に行った。」

« Je suis allé voir ce film. »

「わたしはその映画を見に行かなかった。」

« Je ne suis pas allé voir ce film. »

日本語は、文の最後まで行かないとわからない

わたしが頼んだ本を、彼は買いに行ってくれた。

わたしが頼んだ本を、彼は買いに行ってくれなかった。

わたしが頼んだ本を、彼は買いに行ってくれたらうか？

フランス語の特徴の一つが擬人化

- Tu *marches* vite !
君、歩くの早いね！
- Ton ordinateur *mar*che bien ?
君のパソコン、調子はいいい？
- Non, il ne *mar*che pas. Il est *mort*.
いや、動かない。こわれちゃったよ。

動詞 *marcher* は「歩く；向かう、進む；（機械などが）動く、作動する、稼動する；（乗り物が）走る、動く；（物事が）うまく運ぶ」など、多様な使い方をします。一つの単語がこのように多様な意味で使われるのが、フランス語の特徴の一つです。

（*mort* は「死んだ、死んでいる」）

- Paul se lève / il se couche. ポールが起きる／寝る。
- Le soleil se lève / il se couche. 日が昇る／日が沈む。

それでは、この絵は？



La Liberté guidant le peuple, Eugène Delacroix, 1830.

「自由の女神」？

ドラクロワの「民衆を導く《自由の女神》」と日本語には訳されていますが・・・
直訳は「民衆を導く《自由》」

《自由》－ フランス語では la Liberté

大文字で書かれているのは、擬人化を示しています。

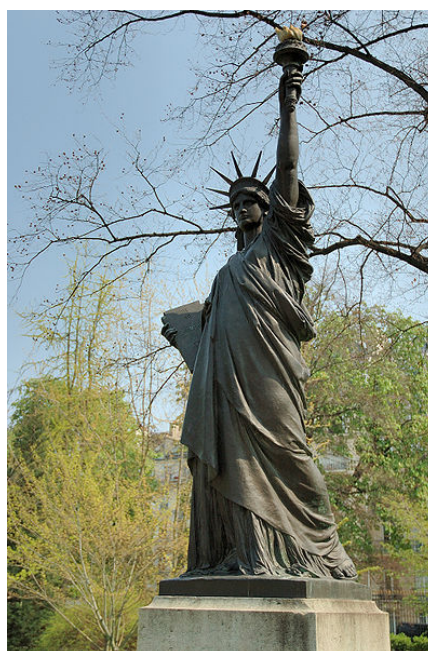
《自由》は世界各地に



ニューヨーク



パリ、セーヌ川



パリ、リュクサンブール公園



東京、お台場にもありました

MA LIBERTÉ

paroles et musique: Georges Moustaki

ジョルジュ・ムスタキ（1934-2013）という、ギリシア系ユダヤ人で、フランスで活躍したシンガーソングライターがいました。彼の歌の一つに

MA LIBERTÉ ぼくの自由

というのがあります。こういう歌詞です。

Ma liberté	ぼくの自由よ
Longtemps je t'ai gardée	長いこときみを大切にしてきた
Comme une perle rare	すてきな真珠のように
Ma liberté	ぼくの自由よ
C'est toi qui m'as aidé	きみはぼくを助けてくれた
À larguer les amarres	舳い綱を解いて出発するのを

いつも、どこに行っても、きみと一緒にだった
つらいことがあっても、いつもきみに従ってきた

でも、あるとき、ぼくはきみと別れた・・・

Et je t'ai trahie pour	そしてぼくはきみを裏切った
------------------------	---------------

Une prison d'amour 恋の牢獄のために
Et sa belle geôlière その美しい女看守のために

自由 liberté は女性名詞

フランス語の「自由」liberté は女性名詞です。

だから、「自由」を擬人化すると女性になるのです。「自由」を女性のように、まるで恋人のように歌うこともできるのです。

フランス語の「くせ」－ 言い換え

フランス語の「くせ」の一つに 言い換えがあります。

例：エマニュエル・マクロン → 共和国大統領 → 国家元首 → エリゼ宮（大統領官邸）

日本語は、同じ言葉を繰り返すことには、それほど抵抗はありません。

翻訳するとき、言い換えた言葉をそのまま訳すと、かえってわかりにくくなったりします。このあたりは、それぞれの言語の特徴や「くせ」あるいは習慣を考慮しながら、訳し分けないとけません。

フランス語の特徴や「くせ」をいくつか紹介しました。

日本語とはずいぶん違った世界が（そして英語とも違う世界が）少しは見えてきたでしょうか？

ここで、外国語を学ぶことの意味を、改めて考えてみたいと思います。

新しい世界に向かって自分を開いてゆく

言葉を思想や文化と切り離すことはできません。

外国語を学ぶとは、その言語が用いられている国や地域の人と文化を知ることでもあります。**言葉と文化をともに学びながら、新しい世界に向かって自分を開いてゆく**－それが本当の意味で外国語を学ぶことなのです。

自己を知るための鏡

外国語を学ぶことを通じて、わたしたちは他者を知り、わたしたちが慣れ親しんでいる日本的なものの見方、考え方とはずいぶんちがった世界を発見します。そのときはじめてわたしたちは、自分の言葉、自分の文化、自分自身を客観的にとらえることができるようになるのです。

他者との比較なしには自己を知ることはできません。そのままでは見ることができない自分の姿を、

他の言語・文化という鏡に映すことによって見る — そこまでいった時、その外国語は「わたしの言葉」となったと言えるでしょう。

語学力とは

改めて考えてみたいと思います。語学力とはなんでしょう？

専門書や知的レベルの高い文章が読める／書けるだろうか？

専門的・知的なレベルの会話／コミュニケーションができるだろうか？

それができるのなら、本物の語学力と言えるでしょう。

たとえば政治や経済、歴史や文化についての本や文章を読む、それについて語る／語り合う場合を考えてみればよいでしょう。専門用語はもちろんのこと、その分野にかかわる知識や経験を総動員しながら、理解し、伝えよう／伝え合おうと努力することになります。

あるいは仕事で外国語を使う場合も考えられます。日常会話レベルの語学力では、ビジネスの世界で通用しません。もちろん、ビジネスにかかわる経験や知識も当然のことながら要求されます。そして、交渉能力も。

文法・読解が基本

文法・読解という世間では評判が悪いですが、この訓練をしっかりとやっておかないと高度な読解力、コミュニケーション能力は身につけません。専門性の高い分野での読書や会話には専門知識が必要であり、専門知識は主として専門書 — まずは日本語で書かれた専門書、そしてさらには原書 — を読むことを通じて身につけるものです。それができるためには、語彙力プラス文法・読解力が必須の条件となってきます。

本物の語学力を支える基盤は、実は文法・読解力と専門的知識そして — もうひとつ大切なものを加えるなら — 魅力的な会話・コミュニケーションにとっての必要条件である教養とユーモアのセンスということを改めて認識すべきでしょう。

ここで、日本語についても考えてみます。

日本語教育の見直し

論理的思考法の訓練としての日本語教育が必要です。

日本の初等／中等教育における「国語」教育では、これが長年軽んじられてきました。ですから、大学に入っても、レポートひとつ満足に書けません。それも当然です。高校までなにも学んでいなかったのですから。

わたし自身は文学畑の人間ですし、国語教育の中で文学的テキストを読ませ、それについて考えさせること自体を否定するわけではありません。

ただ、論理的思考法を教えること

- 論理的に文章を理解する読み方を教えること、
- そして論理的な文章の書き方・組み立て方を教えること

これは、国語教育に限らず、学校教育全般にかかわる重大な課題だと、わたしは確信しています。

なぜなら、この訓練をしておかないと、日本語の読解力が身につかないからです。少し込み入った文章だと、日本語で書いてあるのに、読んでもその内容が理解できないからです。読んでも理解できないくらいですから、まともな文章を書くことも、当然できないのです。

そしてこれは、外国語教育にもかかわる問題でもあります。

日本語力と語学力

わたしが日本語教育にこだわる理由はもう一つあります。それは、どれだけ外国語を学んで力をつけても、母語を越えるレベルには至らない、ということです。

学生・生徒の日本語能力が低ければ、どんな外国語を学ぼうとも、どれほど頑張ろうとも、もっと低いレベルにとどまるしかありません。外国語のテキストを読んでどれだけ理解できるでしょうか？同じ内容の日本語の文章を理解するよりも、遙かに難しいでしょう。

教科書が読めない子どもたち

話が少しとびますが、新井紀子（あらい のりこ）という先生がいます。数理論理学を専門とする数学者で、国立情報学研究所教授、同社会共有知研究センター長をしている人です。2011年より人工知能プロジェクト「ロボットは東大に入れるか」プロジェクトディレクターを務めていて、2016年からは読解力を診断する「リーディングスキルテスト」の研究開発のリーダーも務めています。主著に『数学は言葉』（東京図書）、『コンピュータが仕事を奪う』（日本経済新聞出版社）、『ロボットは東大に入れるか』（新曜社）、『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』（東洋経済新報社）などがあります。とくにこの最後の本は、一度お読みになるとよいでしょう。AIの限界と、「リーディングスキルテスト」の研究開発の過程で明らかになったことですが、日本の中高生の多くが中学校の教科書を正確に読めていないことを具体例を示しながら指摘した「衝撃の書」です。

そこで主張されているのは、**人間がAIに勝つためには「読解力」を磨くしかない**ということです。それもまずはわたしたちの母語である日本語の読解力です！

外国語教育どころじゃない？

そう思いたくなるほどです。

ただ、逆に考えれば、外国語教育と並行して日本語のスキルアップを目指すことも可能ですし、それはそれでなかなか有効な方法でもあるのです。

なぜなら、「言葉を学ぶ」という点においては、外国語学習にも日本語学習にも共通するところがあるからです。例えば「語学力」の基本は「語彙力プラス文法と読解力」でしたが、日本語能力についてもおなじことが言えます。

語彙力がなければ文章の意味を理解できません。文法そして文の組み立て方をしっかりと学ばないと文章をまともに読むことも書くこともできませんが、それは外国語の文章にも日本語の文章にも共通することです。

外国語教育／外国語学習の基本は、日本語能力のレベルアップをはかる際にも援用できるのです。

それはつまり、ここに今いらっしゃる先生方、英語の先生・語学の先生方は、生徒の日本語力レベルアップにも貢献できる、ということでもあるのです。

考える力は読書から

よく考え判断するためには、抽象的、論理的思考能力が不可欠です。しかしそれは、高度な言語能力なしには身につけられません。考える力の基本は言語能力です。それは母語についても外国語についても言えることです。

ところで、言語能力の基本は語彙力と読解力ですが、本を読まなければ語彙力も読解力も身につけませんし、体系的に秩序だてて知識を得ることもできません。

言語能力は、そして考える力は、読書によって磨かれるものです。

言葉を学ぶ意味

ここで、今日の話のテーマに戻ります。

言葉がコミュニケーションの《手段・道具》であることは確かです。

言葉とくに外国語を学ぶためには、《スキル》として学ぶ必要もあります。

しかし、われわれ人間を《人間》たらしめているものは、われわれが《知性》をもち、《考える》ことができ、自由に《判断し》《選ぶ》能力が与えられているということ — まさにそこにあるので

す。そして、その根本に《言葉》があります。

言葉を学ぶことによって、自分の言葉 — 母語だけでなく、身につけた外国語 — を鍛え磨き上げることを通じて、わたしたちは、よく考え判断することができる《柔軟な頭》と、他者を受け入れることができる《広い心》をもつことができるようになります。

言葉を学ぶ意味 — 端的に言えば、それは「人格形成」にあると思います。最終的にはそこに行き着くものだと、わたしは考えています。

外国語教育の意義と役割

いま先生方が教えている生徒さんたちのうち、いったい何割、何パーセント、何人の生徒さんが、英語をずっと学び続けることになるのか、英語以外の外国語を学ぶことになるのか、あるいは、仕事や生活のなかで、なんらかの外国語を使うようになるか、それはわかりません。

ただ、グローバル化が進むこの世界で、外国・外国人との関わりをまったくもたぬまま一生を送る日本人が一体どれだけいるのでしょうか？

たしかに、誰もが外国語の達人になる必要はありません。語学は得意ではないとか、苦手だと思っ生徒は、おそらくいるでしょう。ただ、語学嫌いにだけはなってほしくありません。語学嫌いが嵩じて外国人嫌い、排外主義に陥ったりしてほしくありません。

たとえ語学が苦手でも、外国語ができなくとも、相手を受け入れる心がありさえすれば、コミュニケーションはできます。外国人に限らず、他者に対して、自分とは違う人に対して、外の世界に対して開かれた心をもってさえいれば、親しい交わりは可能です。

生徒たち・学生たちが、自分の母語とは違う言語との《出会い》を通じて《他者》と出会い、《他者》に対して、外の世界に対して、自分を開いてゆくこと、《開かれた心》をもてるようにすること — そこに外国語教育の意義があると思います。

そして、外国語教育に携わる者の役割、語学教師の役割は、学生・生徒たちをその方向に導いていくことにある — そうわたしは考えています。

以上でわたしの話を終えたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。